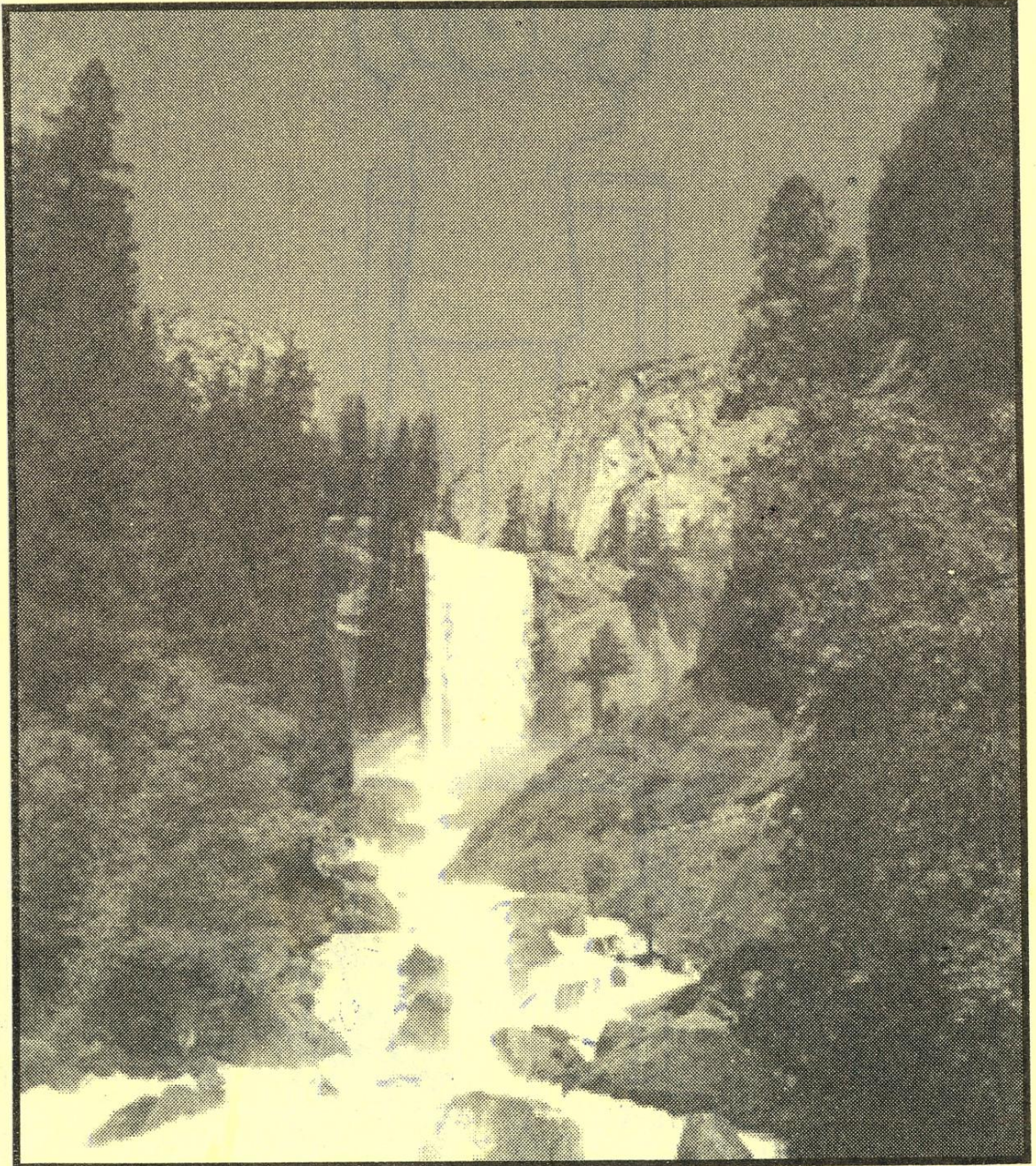


Anchor

No. 24

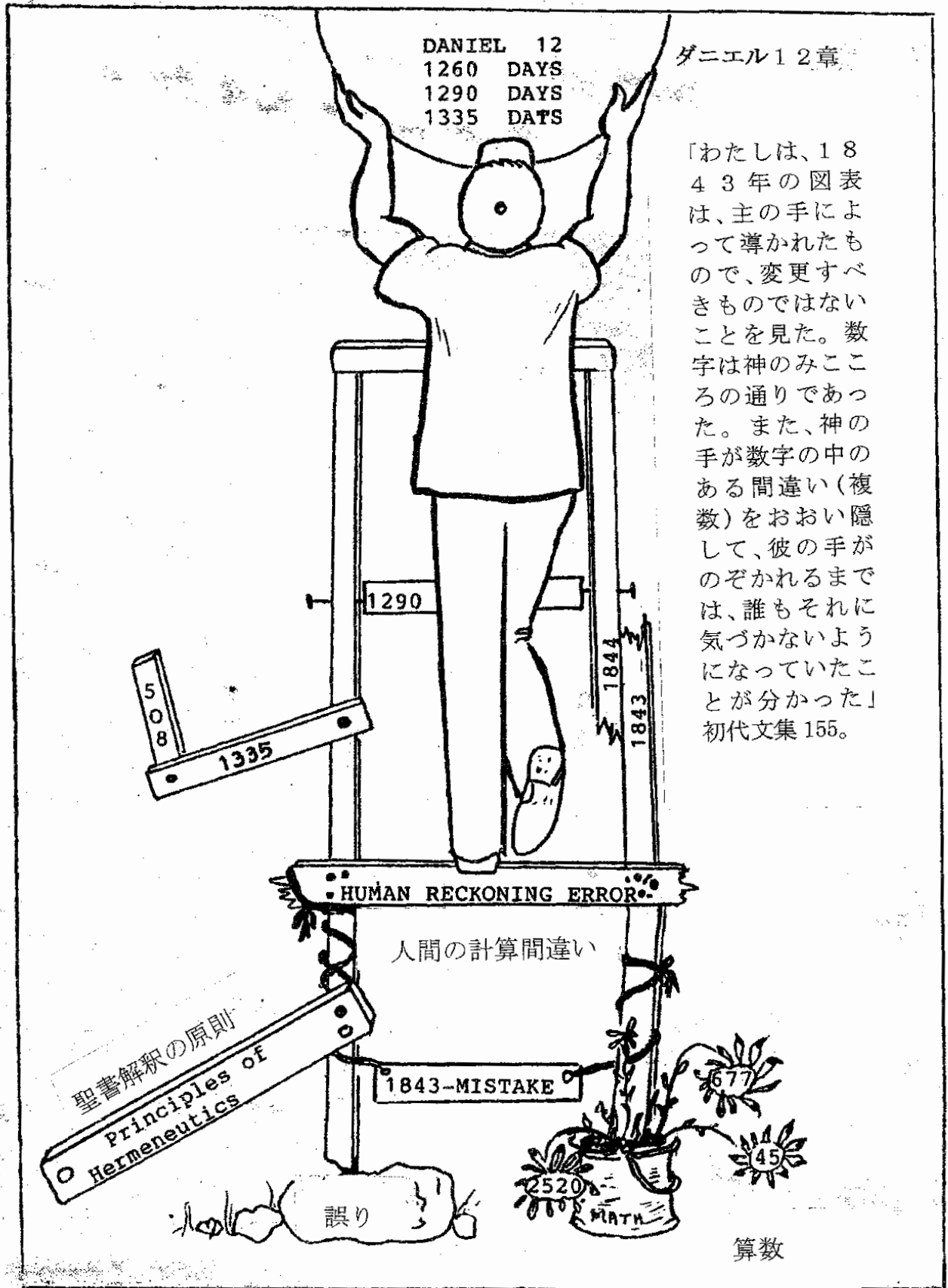
アンカー



「真理は、あなたがたに自由を得させるであろう」

ヨハネ 8:32

1843年の図表



DANIEL 12
1260 DAYS
1290 DAYS
1335 DATS

ダニエル12章

「わたしは、1843年の図表は、主の手によって導かれたもので、変更すべきものではないことを見た。数字は神のみこころの通りであった。また、神の手が数字の中のある間違い(複数)をおおい隠して、彼の手がのぞかれるまでは、誰もそれに気づかないようになっていたことが分かった」
初代文集 155。

HUMAN RECKONING ERROR

人間の計算間違い

聖書解釈の原則
Principles of
Hermeneutics

1843-MISTAKE

誤り

2520
MATH

算数



警告無視の悲劇

豪雨被害

8月14日、神奈川県山北町の玄倉（くろくら）川でキャンプ中の18人が増水事故で流されるという、惨事が起きた。16日午後になっても、新たな救出や遺体の発見はなく、11人が依然行方不明になっているという。救出された父親と娘は喜んだのもつかの間、奥さんが遺体となって発見され、次女が行方不明というニュースに計り知れない悲しみに突き落とされた。

役場当局、ダム職員、警察から、3回も危険地域から立ち退くようにとの警告を受けていたが、気にとめなかった。雨も上がり夏休み恒例のアウトドアキャンプを楽しんでいる最中であった。川の水は穏やかに流れ、広々とした中州で全く危険は感じられなかった。ダム職員は、ダムの水量が増えてきても、警告後なお移動しないキャンパーたちのために、一時ダムの排水をストップした。しかし、ダムの水量は大雨で限度を超えたので、とうとう危険を感じて排水した。濁流はものすごいスピードで流れてきて18人を押し流してしまった。十分な警告が与えられ、移動する十分な時間もあった。また、その地域はキャンプするには危険だとの立て札も立ててあった。素人判断によって、警告を無視する事の恐ろしさを見せられた人災とも言える痛ましい事故であった。

三天使の使命による警告が世界に発せられて久しい。しかし、人々は空を見上げて「快晴だ、嵐が迫っている様子もない」と安心し、富と快樂に夢中になり、警告は無視されているかのようにみえる。天の四方の嵐を必死に引き止めている4人のみ使いは、まもなくその手を離す。その時、玄倉（くろくら）ダムの濁流のごとく大惨事が世界の人々に臨む。今度の事故は、ラオデキヤ教会にとっても警告を与えているに違いない。

「警告を無視して決して無事ではあり得ない」

「エルサレムの滅亡は、世界を襲う最後の滅亡の象徴である。エルサレムの破滅によって部分的成就を見た預言は、もっと直接的には、最後の時代に適用されるべきものである」祝福の山 151。

エルサレム滅亡は、世の終わりの滅亡の象徴と言われているが、教会への証 8巻 67-68 ページに、次のように警告されている：

「エルサレムは、もし神が与えられた光を受け入れることを拒むなら、教会がどうなるかということを表している... 『ああ、エルサレム、

エルサレム、預言者たちを殺し、おまえにつかわされた人たちを石で打ち殺す者よ。ちょうど、めんどりが翼の下にそのひなを集めるように、わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。それなのに、おまえたちは応じようとしなかった』(マタイ 23:37)。そのようにキリストは、神のご要求を果たし損ねた我々の教会、我々の学びの機関のために泣いておられる。... このことは、根拠のない嘘ではない。」

エルサレム滅亡は、「世界の滅亡の象徴」ばかりでなく、我が教会がどうなるかということを表しているとするならば、あまりにも厳粛なことである。もし、そうであるなら、「もみがらのように追いやられる前に」、「法令の前に」(英文欽定訳)(エレン・ホワイトは、日曜休業令に適用している RH11-109, 1908)、容赦なく吹きまくる嵐が目前に迫っている今日、エルサレム滅亡のことについて、マタイ 24 章、マルコ 13 章、ルカ 21 章とダニエル 12 章を比較研究すべき時ではないだろうか。

「どうして、日曜休業令と騒ぐのか」とよく言われる。

繰り返し言わせてもらいたい。日曜休業令は神の民の運命を永遠に決定する事件である。生ける者の裁きの始まりである。まずセブンスデー・アドベンチストの運命が先に決定される。最後のテストである。その時から最後の戦いが始まるのである。悩みの時の開始である。大迫害が始まる。安息日を守る者たちは売買できず、経済的ボイコットに遭うのである。新世界秩序に服さない者は、社会秩序の紊乱者、破壊者として投獄、死の恐怖に威嚇されるのである。良心は圧迫され、財産と身の安全、評判を守るため信仰を捨てるよう強要されるときである。「災害の季節」が始まる。

紀元 2000 年から人類は前代未聞の問題に突入する、とコンピュータ問題の専門家やある政治家たちは言っている。地球環境、食糧、医学、農業、人口問題、老人地獄一少子化問題、エネルギー問題、道徳問題等々の研究家はしきりに警鐘を鳴らしている。SDA が黙っていたら石が叫ぶであろう。ちなみに、ロバート・ジェントリー博士の岩石の研究が進化論を覆し、地球 6 千年説の書籍が、一般の書店に顔を出すようになった。文字通り今、石が叫びだしているらしい。

恐ろしい、消極的な面だけでなく、預言を研究する者たちは、日曜休業令を境に、神ご自身が働かれる時が来るとの約束に心を躍らせるであろう。日曜休業令までは約束の雨は降らないのである。「慰めの時」は英語で “Refreshing” (活気づける) という。日曜休業令を目前にして我が教会は背教の道を下っていく (5 T 209,)。どんなプログラムをもってしても教会は、神の理想の姿にはならない。後の雨で慰められ、活気づけられる時まで、なるがままに放っておくというのではない。悔い改めと信仰と活動によって神と協力して約束を受ける準備をすべき時である。三天使の使命、現代の特別の真理の種を播くべき時である。

だから日曜休業令という事件を軽くあしらってはならないはずである。イエスもダニエルも、ヨハネもそして現代の預言者エレン・ホワイトも、再臨の前の大事件として日曜休業令を挙げているのである。

儀武兄弟が先日、青年の研究会でうがったことを言っていた。

マタイ 24:15 節にイエスが言われた「読者よ悟れ」とは、「聞いて悟れ」と言って

いるのではない。自分で読み、研究して悟れという意味だと。しかも「何を読むのか」、これは明らかにダニエル書であり、「何を悟るのか」、ダニエル12章の未来に関する預言を悟るのであるとはっきり言ってくれた。なるほどと思った。自分で自分の信仰を確立するときである(大下 359~364。ここは是非読んでいただきたい)。

「神のみ言葉をもっと深く研究する必要がある。わたしたちの働きにこれまでに見られなかったほどに、ダニエル書と黙示録に注意を向けるべきである。ダニエル書と黙示録がもっとよく理解されるとき、教会員は全く異なった信仰体験をするようになる。.... 終末時代の危険がわたしたちに迫っている。わたしたちは自分の働きによって、人々が危険の中にあることを警告しなければならない。預言に啓示された厳粛な光景を言及しないままにおいてはならない」TM112-118(S S教課99年第一期、94頁)。

「我々は、自分たちの危険がヘブル人のそれほどではないと考えるが、実際はそれ以上である」(3T353)

警告を怠ることの恐ろしさ

第三天使の使命は、「恐ろしい威嚇の警告」であるが(大下 171、初文 414)、同時に「憐れみの警告」なのである。我々に希望と平安を与えるものなのである(初文 415-416)。

マルコ 13:34 に次のような言葉がある：

それはちょうど、旅に立つ人が家を出るに当り、その僕たちに、それぞれ仕事を割り当てて責任をもたせ、門番には目をさましておれと、命じるようなものである。

目を覚まして絶えず警戒しなければならない門番が、居眠りをしてしまったらどうだろう。群れを守ってくれるようにとの切なる神の愛の訴えを拒み続けた門番たちについて初代文集から引用しよう：

「災害の結果に苦しんで、悪人たちの多くは怒りに燃えた。それは恐ろしい苦悶の光景だった。親は子供たちを激しく非難し、子供たちは親を、兄弟は姉妹を、姉妹は兄弟を非難していた。『あなたがわたしに真理を信じさせまいとしたのだ。そうでなければ、こんな恐ろしい目に会わずにすんだものを』と言って、大声で泣きわめくのが四方から聞こえた。人々は、激しい憎しみをもって牧師たちに向かい、『あなたは、わたしたちに警告してくれなかった。あなたは、全世界の人が悔い改めて救われるときが来ると言ったではないか。あなたは、平和だ平和だと叫んで、恐怖心のおきるたびに、それを静めてしまって、こんなことになるとは言わなかったではないか。わたしたちに警告する人があると、あれは狂信者でわたしたちを滅ぼす悪い人たちだと、あなたは言ったではないか』と言って、彼らを責めた。しかしわたしは、牧師たちも神の怒りを免れないのを見た。彼らの苦しみは、人々の苦しみよりも十倍も激しかった」455-456。

これは、一般キリスト教会の牧師のことだということかもしれない。セブンスデー・ア

ドベンチストの牧師のことを言っているのではないと言えるだろうか。どちらが多く光が与えられているだろうか。

「知らずに打たれるようなことをした者は、打たれ方が少ないだろう。
多く与えられた者からは多く求められ、多く任せられた者からは更に
多く要求されるのである」(ルカ 12:48)。

セブンスデー・アドベンチストは、特別な意味で「門番」である。我々は、「眠っている説教者が眠っている教会員に説教をしている」と譴責されているが、計り知れない神の憐れみと許しのうちに目覚め、悔い改める機会がまだ与えられていることを感謝しよう。



こんな物語がある：

南北戦争の時のことである。北軍のスコットという兵士が、歩哨勤務中に居眠りしたのが見つかった。歩哨の職務怠慢の罪は大きい。銃殺の重い刑に処せられることになった。しかし、スコットは、ふだん正直で勤勉であったので、この男を殺すのは惜しい気がして、中隊長はじめ兵士たちは考えた。その時、みんなの頭に大統領リンカーンの慈悲深い顔が浮かんだ。大統領にお願いしたら、あるいは!と思った。中隊長はリンカーンの営舎を訪れた。『ほかのことと違って、歩哨勤務中の居眠りは罪が重い』

リンカーンはまゆを曇らせた。『もうすこし考えさせてくれ』と言って、中隊長を帰した。厳しい軍律と慈悲!リンカーンも苦しんだ!

リンカーンは、一人で戦線に出ると、スコットを呼んだ。スコットは、すでに覚悟をして前に出た。『君のお父さんは達者かね』

死の宣告を聞くものとはばかり予期していたのに、柔らかい言葉だった。

「ハッ、……」

スコットの中から、知らず知らず涙がわいた。そこで、両親の身の上を詳しく語った。そして、最後に、肌身離さず持っていた母の写真をポケットから出した。

「これが母です。出征のときに、私はいつでもお前といっしょにいるのだから、お前は私と二人分もお国のために働くように、と申しました。… それなのに、自分は、自分は……」

とうとう声を出して、泣き出してしまった。リンカーンの目もうるんだ。そして言った。

「百姓仕事をしていた者には、時間のやかましい軍隊の仕事はむずかしいに違いない。お前の命は助けてあげよう。その代わり、今日から生まれかわった人間になって、アメリカの勇士の手本になってくれ。」

リンカーンの手は、やさしくスコットの肩にかかった。

「ハッ、……」

感きわまったスコットは、流れ落ちる涙をどうすることもできなかった。

それからの彼は、リンカーンの言葉どおり、生まれかわった。

「一度は、死んだ体だ。この体を国のために捨てよう。」

と決心した彼は、どんな時にも真っ先に突進し、いたる所の戦場で抜群の功名を輝かした。死を覚悟している彼に、不思議にも敵弾が当たらなかった。

ある日の戦闘で、次々倒れて行く戦友を介抱して、自分を忘れていたスコットに、ついに一弾が命中した。

「スコットがやられた！」

戦友が飛びつくようにして彼をかかえ起こした。口から血がアワになって吹き出た。彼は最後の言葉をもらした。

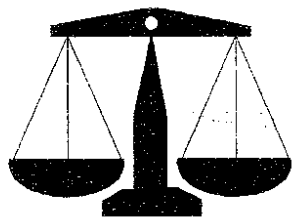
「おお、リンカーン閣下に言ってくれ。自分は閣下とのお約束を立派に果たしました、と。」

★ 長い間居眠りをして職務怠慢の大罪を犯してきた見張り人、我々セブンスデー・アドベンチストは、まだ大祭司イエスの恩赦にあずかれるのである。「悔い改めて本心に立ち返え」(使徒 3:19)り、忠実な思慮深い僕となって、み国の働きのために献身したいものである。

どんな人間でも自分の精神や意志を他人の自由に任せ、無抵抗な機械となることは神のみ旨ではない。だれひとり自分の個性を他人の個性の中に埋没させてはならない。またどんな人間であろうと、いやしを与える源として、その人間を見あげてはならない。人間は神にたより、神より与えられた人間の威厳をもっていかなる人間にも支配されず、神によって支配されるべきである。

神は人間をご自分と直接的関係におこうとお望みになっている。神が人間に接しられる場合、必ず人間の個人的責任の原則を認められ、個人的信頼の念を起こさせ、個人的な指導の必要を印象づけようとなさる。また人間を神との交わりに入れようと望まれているが、それは人間が変えられて神に似るようになるためである。サタンはこの目的をくつがえそうと働き、人間に依頼する気持ちと強めようと努力している。

ミニストリー・オブ・ヒーリング 219, 220.



≡ ダニエル12章に関する論議 ≡ マリアン・ベリーの解釈か 世界総会聖書研究所(BRI)の解釈か?

ついに世界総会聖書研究所 (BRI) による、マリアン・ベリーのダニエル 12 章の研究への反対論評が配布された。「偽りの教師に注意せよ」との「警告」である。マリアン・ベリーの「警告」という本に関して、牧師並びに関心ある信徒に提出された論評である。

どちらの解釈が正しいのだろうか?

世界総会聖書研究所(BRI)がベリーの解釈に反対する理由:

(ダニエル 12 章に関する主なことだけ)

1. マリアン・ベリーの解釈は、従来のセブンスデー・アドベンチスト解釈と異なっていて、全く聖書的根拠がない。ダニエル 12:5~13 は、過去のことを繰り返しているのであって、未来のことではない。
2. ダニエル 12 章の預言の期間を字義通り、一日を一日と計算することは間違いである。
3. 時を設定している。
4. ダニエル 12:7 の「一時と二時と半時」という表現は、ダニエル 7:25 と同じ表現だから、同じ事件のことを言っている。
5. 預言の二重適用一成就という見解は非聖書的である。
6. 「常供の燔祭」は、聖所におけるキリストの仲保の働きであって、「力と位と権威」、すなわち主権のことではない。

新しい光への対応

それに対するマリアン・ベリー自身の答えがあるので、読者は両方の言い分を聞いて、自分で判断していただきたい。今日、約 10 カ国語に翻訳されている、このダニエル 12 章の研究は、神からのものか、それとも「偽りの教師」の仕業なのかを知る必要がある。もしこれが、神が今日の神の民を来るべき事件に準備させようとする新しい光であるなら、十分な関心を払う必要がある。指導者や世界総会聖書研究所 (BRI) が否定しているから、異端だと簡単に片づけることは危険である。

「もし理解できない使命に接したなら、その使命は神のみ言葉に根拠を置くものかどうか、聖句と聖句を比べてよく調べ、その使命を伝えた人

の語る理由をよく聞くようになさい。もしその見解が神のみことばに基礎をおいていないことを信じ、その問題に関してあなたが持っている見解を否定することができないなら、あなたは自分の確固とした理由を話しなさい。あなたの見解は誤謬に接しても揺るがないでしょう。見ることを恐れて目を閉じ、聞くことを恐れて耳をふさぎ、へりくだって、ある真理について光を受けたことを認めなければならないことを恐れて、無知と不信の中に心をかたくなにして暗黒の中に戦い続けることには、何の徳も、何の勇らしさありません。……

ある人の努力の結論をくずの山と呼び、あなたがいけないという思想の中に尊い真理の宝石があるかどうか批判的に調べもしないでいるのは、隠れた宝を探求していることになるでしょうか」安息日学校への勧告 27, 28。

「我々は人の研究の中に、これは完全だといえるものがあるとは誰も言わない」福音宣伝者 301。

「聖書のみ」を唯一の権威であるとするのは、証の書は権威ではないという意味ではない。この二つを切り離し、証の書を軽視することは、新神学の「組み立てられたアンチテーゼ (反定立) = Constructed Antithesis」である。アンチテーゼとは、二つの重要なものを対比させて、どちらか一方を他よりも重要とすることである。なぜ、ここでこんな事に言及するかというと、「聖書、聖書のみ」と言って、聖書が重要視しているイエスの証を軽視することが流行しつつあるからである。「おきてと証」が信仰と教理の基準である。それは、また今問題になっているダニエル書の反論に、このアンチテーゼが用いられているからである。「時や、事件よりも」「主イエスを知ること」だと。このような説き方がラオデキヤ教会を内部からどれ程むしばんでいることか。

話を元に戻そう。今日、聖書、聖書のみと言いながら、結局は、教会の権威を振り回す傾向がある。

「学識者の意見、科学の推論、教会会議の定めた信条や決議(これらは、教会の数が多くてその主張も違うように、おびただしい数にのぼって内容も千差万別である)、大衆の声、——これらのうちの一つであれ全部であれ、それをもって信仰上の事柄に関する賛否の根拠と見なしてはならない」大下 360。

今問題視され、反対されているダニエル 12 章の預言の研究は、無視できない。

「宗教的危機における無関心と中立は、神から嘆かわしい罪と見なされ、最も悪い、神に対する敵意に等しいものである」中希望 92。

このような論議は初めてだとか、何が論争点なのかわかりにくいという方々のために是非お勧めしたいのは、ベリーの「警告」の本である。多くの方々がダニエル書、黙示録の深い意味を悟りはじめ喜んでいる。彼女の解釈が最も妥当だということは、アンカー NO. 20, 21, 23 に説明しているので、何回も納得いくまで学んでいただきたい。それらと BRI の論評を比較研究しながら、ご自分で判断していただきたい。

ここでは、アンカーでまだとりあげなかったことを考えてみよう。

A. 12章が未来のことであることが証明されれば、事は簡単である。

1. 主イエスは「預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべきものが、聖なる場所に立つのを見たならば、(読者よ、悟れ)」、そのときユダヤにいる人々は山へ逃げよ」(マタイ 24:15)と言われた。

このことは、第一義的には、① エルサレム滅亡のことで、② 世の終わりのことの二重の事件を預言しておられた。我々はこの預言を中世時代に適用するが、間違いではない。第二義的な適用ができるからである。しかし、預言者は、「エルサレムの滅亡によって部分的成就を見た預言はもっと直接的には、最後の時代に適用されるべきものである」(祝福の山 151)と言っている。

そうであるなら、ダニエルによって言われた荒らす憎むべきものとは、ダニエル 7:25, 11:31 でいう中世時代の法王至上権のことではないはずである。中世時代の法王至上権は、ヨーロッパに限られていた。今度は「最後の時代の荒らす憎むべきもの=法王至上権 No 2 の事を指しているとは考えられないだろうか。

2. ダニエル 11:1~12:4 まで一つのユニットである。11章の預言は、順序よく、秩序正しく、前進運動の原則に従って諸事件が記されている。特に 11:40~12:3 までは、最終時代の出来事で、1990年から、キリストの再臨までの諸事件を描写している。地上歴史のクライマックスへの最後の諸事件である。北の王=ローマ法王教の世界制覇、政治、経済、宗教の世界的支配、神の介入—大いなる叫び、最後の戦い、エルサレムに世界礼拝のセンター設立、大いなる悩みのクライマックス、「絶体絶命の時」に神の民の救出、義人の復活、キリストの再臨—永遠という諸事件である。
3. ダニエル書を閉じるにあたっての、エピローグにおいて、ダニエルの最大の関心事は、中世時代のことではなかったはずだ。彼が最大の関心をもっていたのは、最後の「この異常な出来事」であった。だから「この異常な出来事は、いつになって終わるでしょうか」と質問したのである。欽定訳では、「これらの不思議なことの終わりまで、どのくらいあるのですか」となっている。ダニエル 11:35 以前のの中世時代のことではなく、最後の時代に神の民にふりかかる史上最大の艱難、迫害の時に神はどうなさるか、また、神の民を地上から抹殺しようとする「サタンの傑作」「サタンの代表者」の滅亡、神の民の救出までどれくらいあるのかと質問しているのである。これらのことは、容易に理解できるのではないだろうか。11章、12章に出てくる「終わり」という言葉は、ヘブル語で「最終末」「最末端」という意味であるとベリーは説く。
4. 預言者、エレン・ホワイトもダニエル 12章は未来のことだと言っている：

1903年にこう言われた：

「ダニエル 12章を読み、研究しようではないか。それは終わりの時まで、我々すべての者が理解を必要とするであろう (shall need) 警告である」手紙 161。

「大終結の前夜まで延びているダニエルの預言的期間は、そのとき起こる諸事件に、光の洪水(あられるほどの光)を投げかけている」RH9-25,1883。

「大終結」とは再臨のことである(大下11)。再臨の直前までのびているダニエルの預言は、1260日/年の預言ではない。2300日/年の預言でもないことは、誰でも分かるはずだ。では、どの預言的期間であろうか。ダニエル12章の三つの預言的期間—タイムラインしかない。

「これら[黙10:4の7つの雷の声]は、順序よく開かれていく未来の諸事件に関することで、.... 時に関することである。そのときダニエルの預言は、世に伝えられるべき、第一、第二、第三天使の使命において、その正しい位置を占めるであろう」7BC971、1MR99。

未来の諸事件に関することで、しかも時に関することと言えば、ダニエル12章のタイムライン以外にないのである。

ユダヤ人の再臨説教者、ジョセフ・ウォルフは、ダニエル12:4を次のように注解している：「ダニエルよ、あなたは終りの時までこの言葉を秘し、この書を封じておきなさい。多くの者は、あちこちと探り調べ(時について観察し思考するというヘブル語)、そして知識(時に関する)が増すでしょう」(ダニエル12:4)。時に関する知識は、1798年、1844年以後はもう増し加えられることはないと言うのであろうか。預言に関する知識は「神の民がそこに含まれている教えを必要とするに従って、代々に示される」はずではないか(大下36)。大終結に向かって知識はなお増し加えられるはずである。

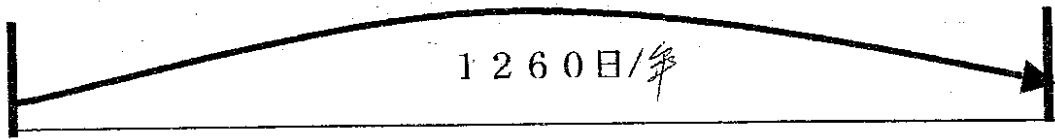
そして、今ダニエル12章が解説されつつあることは、神のみ摂理と認識できないであろうか。

B. 従来の SDA の解釈は、誤りを含んでいた1843年のチャートに基づいている。

初代文集155ページに、再臨運動の先輩たちが用いた1843年チャートは、神が導かれたものであったが、「神の手が数字の中のあるまちがい(複数)を覆い隠して、彼の手がのぞかれるまでは、誰もそれに気づかないようになっていたことが分かった」と書かれている。何が間違っていたのであろうか。

再臨運動の先駆者たちは、どのように12章のタイムラインを計算したのであろうか。アンカー22号で説明したことをもう一度繰り返させてもらいたい。

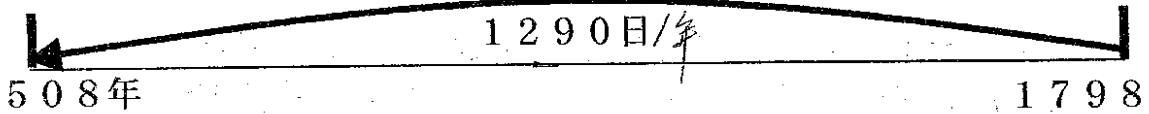
まず、ダニエル7:25の「ひと時とふた時と半時」という同じ言葉が使われているので、ダニエル12:7も同事件と考えた。



538

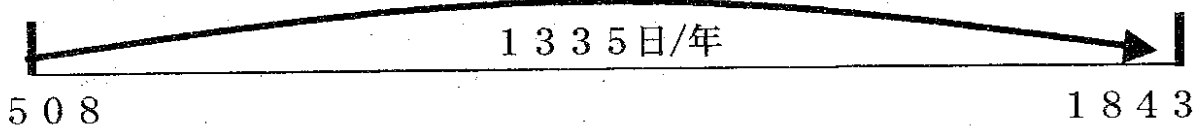
1798

当然、1290日も、象徴的数字と考え、1798年から引いた。すると508年と出た。508年にどんなタイムラインの起算点になる事件が起きたのだろうか。



508年に起こった事件を捜してみたら、フランクの王、クロービスがカトリックに改宗していた。しかし、それが預言のタイムラインの開始に何の意味があるのだろうか。一個人が改宗したからといって、「常供が取り除かれて、荒らす憎むべきものが立てられる」ということにはならないはずだ。

さらに彼らは、1335日も508年から計算してみた。



すると、1843年に当たる。しかし、再臨は1844年にあると思っていたのに、どうして1843年という数字を使うのだろうか。1843年という誤った数字を基準にすれば誤った答えが出てくるのは当然である。

村上良夫先生は次のように言っている：

「こんなふうにあれこれ考えて当てはめようとするわけですが、しかし、1290日の終わりを示す出来事には触れられていませんし、1335日にいたっては始まりの出来事も終わりの出来事も言及されていませんので、確かなことは分からないと言うのが正直なところです」(ダニエル書講義 222)。

ここで先生は、従来の解釈に聖書的根拠があるとは言えないと指摘しているのではないだろうか。

再臨運動の先駆者たちにとっては、1843/44年は、キリストの再臨、世の終わりと思っていたので、ダニエル12章の預言のタイムラインを無理に過去に当てはめて解釈したのであった。神の手がその過ちを覆い隠したのであった。

ダニエル12章のタイムラインが誤っていたことを認めて、後にジェームス・ホワイトらはそれを訂正して、1850年のチャートには1290日、1335日のタイムラインを入れていない。

別紙差込の二つのチャートと比較していただきたい(鮮明なコピーを欲しい方は、英文で入手できます)。

しかし、残念に思うことは、今なお我々は、1843年のチャートのように、ダニエル12章のタイムラインを執拗に過去に当てはめているのである。

C. ダニエル12章は字義通りに解釈されるべきである。

以上の理由で、もしダニエル書12章が未来に適用されることが分かれば、3つの預言の期間—タイムラインは、1日1年と解釈すべきではないということが分かるはずである。字義通りの1260日の迫害期間、字義通り1290日の法王支配期間、字義通り1335日待つ、天からのみ声で祝福(さいわい)を聞くのである。

主イエスが、最終時代の「選民のためには、その期間が縮められるであろう」と言われたのは、そういう意味があるのかもしれない。つまり、1260年の長い迫害期間ではなく、1260日に「縮められる」のではないか。

ある人がこう反論してきた:

「ベリーは、大争闘下巻 365 頁の言葉『聖書の言葉は、象徴や比喩が用いられていないかぎり、その明瞭な意味において解釈されるべきである』という文を引用して『字義通り』にと解しているが、エレン・ホワイトは、そうは言っていない。『その明瞭な意味』と『字義通り』とは意味が違う」というのである。

では、1999年第一期安息日学校教課、レオ・バンドルソンの言葉を引用しよう:

「聖書解釈の一般的原則は明らかに比喩や象徴が用いられていない限り、聖句は自明な文字通りの意味に従って理解されるということです」p87。

セブンスデー・アドベンチストの聖書解釈シンポジウムにおける、ドン・ニューフィールドの言明を引用しよう:

「聖書のすべての言明は、文脈とよく知られている語法において、言葉が字義通りでなく、比喩的であるとき以外は、最も明瞭な意味で、字義通りの意味で理解されるべきである。そして、どんな比喩も他の字義通りの聖書の言葉によって説明されなければならない」G.M.Hyde, ED.: A Symposium on Biblical Hermeneutics. (Washington, D.C.: Review and Herald Publishing Association, 1979), statement by Don Neufeld.

聖書の章や節は後世になって便宜上付加されたものであるから、字義通りとるのか、象徴的にとるのかは文脈をよく見る以外にない。

D. 「預言の二重の成就、適用はない」か？

セブンスデー・アドベンチストのコメンタリー(注解書)を書いた神学者たちは、「聖書には二重の適用がたくさんある」(一卷 1017)と書いたが、コロラド・グレイシャービューの委員会(1980)はそれを否定した。

1999年第一期安息日学校教課、レオ・バンドルソンの言葉：

「特定の歴史上の事件が後の出来事のうちに対応するとか、あるいは預言的記述が二重に適用される、と正当に判断される基準は何であろうか。その答えは、靈感を受けた記者がそのような適用をしているということである」 P87。

「たとえばマタイ 24 章のような二重の適用を持つ預言は、誤解され、誤用されがちです。その一つの理由は、聖書の読者が二重適用の原則を忘れることにあります。そのような人は一つの適用だけを重視し、もう一つの適用を無視します」 p88。

E. 決して時を設定しているのではない。

ベリーは、繰り返しキリストの再臨の「正確な『その日、その時』は分からないが、日曜休業令は、その接近を明確に知らせる事件だ」と言っているのである。

預言の期間—タイムラインを計算することが、時の設定だという人がいる。そうだろうか。黙示録の「1日」、「1時間」、「1000年間」のタイムラインも時の設定をすることなのだろうか。

「正確な時(definite time)」と「預言的時(prophetic time)」の違いを知らなければならぬ。これは、「ごまかしの言葉」ではない。

F. 著者と、著書を曲解することは慎むべきである。

彼女は、女預言者などではなく、ただ預言の研究者だというにすぎない。実に綿密、冷静な研究である。そして、聖職者ばかりでなく、信徒は誰でも預言の研究者として神は用いられると説く。

「卑しい器を用いて大きな業績を完成することが神のご計画である。そうするならば栄光は、人間たちではなくて、彼らに願いを起こさせてそれを実現に至らせ、その御心を行わせられた神に帰せられるのである」大下 208。

神意は、必ずしも権威者、指導者だけから来るのではない。ジョン・ロビンソンのピューリタンたちへの告別の言葉は、今日のセブンスデー・アドベンチストに対するメッセージではないだろうか(大争闘上 374-375)。

「福音がまだ伝えられていない世界の人たちに、主の再臨の準備をするための福音をもっとよく伝えることができたのに、この「警告!」のプロジェクトに大金が投入されたことは嘆かわしい」と論評者は言う。

私はベリーを弁護することに時間を費やしたくない。ベリー自身もこのことに関しては口を開かないと言っている。

しかし、一言、言わせてもらいたい。

この夏、ベリーさん一行とセミナーのために旅行した。彼らの質素、節約の生き方は、我々に対する譴責であると思った。ある人の犠牲的な計らいで、東京だけは、外人組をホテルに泊めさせていただいた。それ以外は、親切な信者の方々が犠牲的に家庭を解放して泊めてくれた。彼らは非常に喜んでくれた。西洋式のトイレを使えないところもあった。ベリーさんは心臓病を持っていてペースメーカーをいれている。それに麦類アレルギーで、かわいそうなほど食事制限がある。それなのに、無理かと思われる計画に一つの文句も言わず、長時間講義をしてくれた。招待される国々において、ある時は肋骨を折ったこともあり、転んで捻挫したこともある。異なった食文化の問題もあろう。それでも77才の老体にむち打って、迫り来る大いなる悩み、危機に警告を発しながら、招かれるところにはどこへでも出かける。今月また、ドイツの神学校で一週間のセミナーに招かれた。

自らは神の約束に信頼して「自分は超楽観主義だ」と言う。いつでも冷静に、しかも魅力的なスマイルを見せていた。どんな皮肉的な質問にも冷静に対応する。ある健康ランドで公衆風呂に入り、彼女のスマイルに、マザー・テレサのようだと評した人もいたとか。彼女の出版を経済的に支援している方の靴下、下着は私のものよりはるかに悪かった。

彼女の研究で、セブンスデー・アドベンチストでなければならない確信を与えられた方々は、少なくはない。20年以上もセブンスデー・アドベンチストの教会に行きながら、その意味を見失って教会行きをやめようかと思っていた方が、マグダラのマリヤのように喜びの涙で感謝を表して、ベリーさんと抱き合っていた姿を、私は忘れることができない。

弟子たちは、マリヤの感謝と献身の表現—香油そそぎを見て憤って言った：『なんのためにこんなむだ使いをするのか。それを高く売って、貧しい人たちに施すことができたのに』。イエスはそれを聞いて彼らに言われた、『なぜ、女を困らせるのか。わたしによい事をしてくれたのだ』 マタイ 26:7-10。

組織の中でどんな無駄づかいがなされているかをとやかく言う必要はない。そういうことは公正なさばき主にゆだねた方が賢明であろう。

結論:

1. ベリーの使命は、第三天使の使命の福音をバランスよく説いているだろうか。
 - ① 獣とその像とその刻印に対する警告を発しているだろうか。
 - ② 「魂を安全にし不動にする錨であり、かつ『幕の内』にはいり行かせる」希望を与えるものだろうか（ヘブル 6:19、初代文集 414-417）。
2. 時の切迫感を与え、希望を与え、セブンスデー・アドベンチストとしての義務感に目覚めさせるだろうか。

3. ダニエル、黙示録の研究心をかき立てるだろうか。証の書、特に各時代の^{大争闘}をつぶさに探り調べたいという気持ちを起こさせるだろうか。

4. 罪なき完全を懇願するように導くだろうか。

我々の模範であられるイエスは、完全な罪のない生涯を、我々のためにおくられた。その思いにおいて完全であられた。彼には罪の欲望がなかった。サタンに何のすきも与えなかった。彼には罪がなかった。「これが、悩みの時を耐えぬく人々のうちになければならない状態なのである」

この経験は「今われわれが持っておらず、また多くのものが怠けて持とうとしない経験」である。大争闘下 397、6 BC1118 参照。

5. これは、我々にセブンスデー・アドベンチストでなければならない理由と確信を与えるだろうか。

「わがはと、わが全き者はただひとり、彼女は母のひとり子、彼女を産んだ者の最愛の者だ。おとめたちは彼女を見て、さいわいな者となえ、王妃たち、そばめたちもまた、彼女を見てほめた」 雅歌 6:9。

これは、キリストの花嫁、セブンスデー・アドベンチストの描写である。

もうすぐ、キリストとサタンの大争闘が終わる。信仰をもって今から天の大群衆のコーラスを練習しようではないか。

わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。小羊の婚姻の時がきて、花嫁はその用意をしたからである。

彼女は、光り輝く、汚れのない麻布の衣を着ることを許された。この麻布の衣は、聖徒たちの正しい行いである」(ヨハネの黙示録 19:7、8)。

S. K

第三天使の使命

消極面
(反キリスト)



積極面
(キリスト)



権威の刻印
第7日安息日
土曜日

「獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、... 神の激しい怒りのぶどう酒を飲み、」
黙 14:9, 10。

(それは)

7つの災害

「天と地と海とその中のすべてのものを造られた方を伏し拝め....」

神のさばきがきたからである」
黙 14:6-12。

(それのみ)

7つの災害を逃れる方法



第三天使

調査審判

最後の仲保

最後のあがない

(at-one-ment)

聖所の清め

罪の除去

衣替え

神の印

契約が永遠に成就

婚姻

慰めの時-活気づける

世界総会聖書研究所(BRI)の論評に対する マリアン・ベリーの返答

砂川満 訳

前置き

紀元 2000 年におけるアドベンチスト教会内の最も激しい論争点は、ダニエル 12 章のタイムライン、1260 日、1290 日、1335 日の適用でしょう。

ダニエル 8 : 14 の 2300 日 / 年のタイムラインは、1844 年当時の論争点でした。ダニエル 7 : 25 の 1260 日 / 年タイムラインは、プロテスタント宗教改革における重大な論争点でした。ダニエル 9 : 24 - 27 のタイムラインは、キリストの時代、メシヤを識別するにあたっての論争点となりました。ダニエル 12 : 5 - 13 の三つのタイムラインは、今日の重大な論争点です。

「真理には、どの時代でも新しい発展があった。つまり、時代ごとに、その人々のための特別の神からの使命があった」(実物教訓 105 ページ)。

しかしどの時代でも、解明されつつある預言的タイムラインの成就に対する激しい反対がありました。各時代の歴史的ドラマの主要な諸事件において、その正確な時と登場人物を特定したときに、戦いの火蓋を切らせたのは、ダニエル書のタイムラインです。どの時代でも、現状を維持するために、前進していく預言の注解に抵抗し、多くの論争を起こしてきたのは神学者たちでありました。自ら「教会の信条」と呼ぶ、預言に関する長年の間守られてきた伝統的見解の保護者は自分たちであると彼らは考えています。1844 年当時、2300 日 / 年のタイムラインを研究したために、多くの家族が教会から追い出されました。ローマ法王至上権の期間中 (538 - 1798 年)、預言を解説した「異端者」たちは火刑に処せられました。パリサイ人や律法学者らは、ナザレのイエスにおいて成就した預言を否定するために、ダニエル 9 : 24 - 27 のタイムラインに表されたメシヤの預言に丸となって反対しました。

数々の論評、拒絶、否定や反対にもかかわらず、「現代の真理」は勝利してきました。預言の正しい注釈は「机上の空論」としてつぶれることなく、無知や偏見や反対、またありとあらゆる誤謬の波を押しやって前進するのです。ダニエル 12 : 5 - 13 における三つのタイムラインの正しい適用は、崩壊することなく、第三天の警告使命において「大いなる叫び」へと膨れ上がることでしょう。ししがほえるように、「もう時がない」すなわち、字義通りの恩恵の時、また預言の時はことごとく終わる、と宣言することでしょう。

以下は、考察を必要とする様々な項目を指摘した、論評に対する返答です。

著者の立場

1987年の秋に、著者は「警告」の原稿をBRI宛に郵送しました。彼らが希望されるなら、私の名を載せなくても、何らかの方法で使っていただくよう提供されたものでした。が、もし彼らが望まれないのなら、それを自分で出版するつもりでした。(三ヶ月後ではなく)三年後に、彼らからの返事が一切なかったので、それを自分で出版社に持っていった次第です。それをBRIに論評あるいは承認してもらうよう要求したことは一度もありません。



BRIの論評2ページ：「この個人的な試みである出版物『警告』は『時』について誤った興奮に人々を導く可能性がある」ので、BRIは牧師と関心をもつ教会員に以下の論評を提出する。」

返答：本書「警告」は、世界各地に配布されてきましたが、本書によって「時」についてのいかなる「誤った興奮」も起こったことはありません。合衆国、カナダ、中南米、アフリカ、またアジアの至るところで何百というセミナーが催されてきましたが、「時」についての誤った興奮が見られたことはありませんでした。むしろ、恩恵期の終了に対する霊的準備が必要であるとの真剣な思いと、神の言葉は完全無欠であるという深い確信が見られました。多くの人たちが自分たちの不安定な弱い状態を認めましたが、セミナーによって、アドベンチズムをありがたく思う気持ちは新たにされたのでした。セミナーに参加した人たちの一致した証は、「疑問が解かれ、混乱が取り除かれた」といったものでした。セミナーの結果教会を去った人は誰もいませんし、指導者批判の時間的余裕などありません。「時」についての誤った興奮への恐れが、論評配布の理由ではありません。唯一の「恐れ」と誤った興奮は、BRIと、最終世代のための「現代の真理」をもたらす、ダニエル12章における三つのタイムラインの研究に反対する人たちだけに見られるようであります。



論評2ページ：「エレン・ホワイトも先駆者たちも、これら終末の出来事をタイムラインの碁盤目に当てはめようとはしていなかった。」

返答： 勿論です。ダニエル12:5-13の三つのタイムラインは「秘し、かつ封じておかれ」ました(12:9)。これらのタイムラインは、「終りの時まで」開かれないことになっていました。「終りの時」とは1798年と1844年のことであると多くの人は想定しますが、エレン・ホワイトがダニエル12章について書いたとき、彼女はこの言葉を置き換えて、時の終わり(終末)に当てはめました：

「ダニエルは二度も尋ねた、『時の終わりまでどれくらいでしょうか』と」(牧師への証114,115ページ)。

ダニエル 12:5-13 で用いられている「終り(結末)」という語は、ストロングの聖書語句辞典によると、「究極の終り」、「時の」[終点]あるいは[時の]「末端」といったヘブライ語の意味があります。

「真理には、どの時代でも新しい発展があった。つまり、時代ごとに、その人々のための特別の神からの使命があった」(実物教訓 105 ページ)。

エレン・ホワイトも先駆者たちも、我々の終末時代に生存していた訳ではありません。預言注釈の研究(フルーム博士著「我らの父祖たちの預言的信仰」)は、預言がその成就の直前、あるいはその時に理解されることを示しています。

時の終わりに生存していなかった先駆者たちは、「歴史の捕虜」(時が来るまではなにもできない)であったと考えられています。ダニエル書の最終章は、最終世代のためにあるものです。彼らが悩みの時と最後の七つの災害に直面するとき、彼らに希望と確信を与えるためのものです。

「ダニエル書 12 章を読み、研究しようではないか。それは終わりの時まで、我々すべての者が理解を必要とするであろう警告である」(エレン・ホワイト、手紙 161、1903 年)。

「警告」は、過去の諸事件に関して与えられるものではありません。警告は、過去の法王至上権に関して与えられているというよりも、むしろ第二の法王至上権に関するものなのです。「全地の人々が驚きおそれて、獣に従」うとき、「獣」は人々に「獣の刻印」を課すことでしょう。それは未来のことです。「警告」は、常に未来の危険に関するものなのです。



論評 2 ページ:「……ダニエル 12 章タイムラインを未来に置くためには健全な聖書的根拠がまったくない……。」

返答:このように述べることは容易でしょうが、同様に「ダニエル 12 章のタイムラインを過去に置くための、健全な聖書的根拠は全くない」と言うことも容易なのです。事実、ダニエル 12:5-13 におけるタイムラインの過去への適用は、1843 年の図表に基づいていました。それについてエレン・ホワイトは、「数字の中のある間違い」があったと解説しています。1335 日というダニエル 12:12 タイムラインが、1843 年という年代から引かれて、508 年という誤った年代を導き出しました。ダニエル 12:12 の 1335 日の成就を過去に置く適用は、聖書的根拠に基づいていたのではなく、1843 年という間違っただ数字の操作に基づいていました。BRI の神学者たちはその間違いをご存知ないのか、何の訂正もしておられません。しかしながら、先駆者たちは 1850 年の図表を作成し、そこからは 1335 日が除去されているのです。彼らは 1843 年までにすべての時が終わると予期していましたが、自分らの間違いを見たときに、1335 日の適用が正しくなかったことを知ったのでした。にもかかわらず、BRI の神学者たちは、今になってもそれらの適用を擁護しているのです。

注:この問題に関して、著者の新しい本「日時の設定、未来主義と不正な神学」で、過去に適用することの多くの問題を論じている。近日中に翻訳予定。英文入手可能。

著書「警告」は、確かに吟味されねばなりません。本書の聖書的根拠とは何でしょう？

1. エレン・ホワイトが聖書的解釈の原則を明言し、それらを一貫して当てはめている。
2. 定義し解説した聖書的解釈の原則を更に明言し、それらを一貫して当てはめている。
3. ダニエル書と黙示録に相互を解釈させている。聖書自体が聖書の解釈者。
4. あらゆる伝統的見解と人間の推測を無視している。
5. 著作全体にわたり、聖書的原則と定義のみが用いられている。
6. 健全な聖書的原則を一貫して当てはめた故に、本書「警告！」は何千何万もの人々に受け入れられ、奨励されています。



論評3ページ：「著者の見解では、……まちがった原則の解釈に基づいている。」

返答：答えは上で述べましたが、著者は、聖書かエレン・ホワイトの書物に見られる解釈の原則または規則だけを用いました。すべての言葉や定義は、預言者の説明か、ストロングの聖書語句辞典に載っているもともとのヘブライ語の意味から取られています。論評では、「警告」の中に解釈の原則が侵されたところを何も指摘せず、彼らの異なる意見だけを提供しています。



論評3ページ：「著者の基本的な誤りは、ダニエル書 12：5 - 13 を他の幻との関連から独断的に切り離しそれを独立した預言として扱っていることである。」(ダニエル 12：5 - 13 は「切り取られ」ており、ダニエル書の切断部分である)

返答：ダニエル書の四つの歴史的(預言的)アウトラインを、エピローグ[終幕一芝居の終わりの納め口上]から切り離したのは、(警告の著者ではなく)預言者ダニエルを通して語っておられる神なのです。ダニエル 12：4において、四つのアウトラインを封じるようダニエルに語られたのは神でした。その後で、ダニエル 12：5 - 13 のエピローグが始まります。次の神からの指示に注目して下さい：

「ダニエルよ、あなたは終りの時までこの言葉を秘し、この書を封じておきなさい」(ダニエル 12：4)。

確かにダニエル書には、様々な帝国の興亡を描いた四つの歴史的(預言的)アウトラインがあります。第四のアウトラインは、ダニエル 12：3 で終了します。その時、アウトラインの書が封じられるのです。ウェブスター辞典によると、エピローグは、作

品(働き)がどのように終わるかを説明するものとあります。おかしなことに、BRIを代表してこの論評をお書きになったウィリアム・シェー博士は、彼の最近の著書「ダニエル7-12」(217ページ)の中で、ダニエル12:5-13はエピローグであると解説しておられました。これらの聖句は、簡単に言えば、質問と答です。「時の結末までどのくらいあるのですか？」との問いに対し、「作品(働き)が終わる」までどれくらいかかるかを、三つのタイムラインでもって説明しているのです。四つの歴史的(預言的)アウトラインは各々、エピローグと同様、キリストの王国の樹立と法王権の滅亡でもって終わっています。なぜなら、それが地球歴史のクライマックスだからです。



論評4ページ：「……字義通りの言葉で表現されていても、それがダニエル12:5-13を第四の幻とのまとまりから、あるいはダニエル書にあるほかの三つの大きな預言のアウトラインとのまとまりから、切り離すための根拠とはならない。」

返答：「警告」の著者は、ダニエル12:5-13の字義通りの言葉が何かを切り離すための根拠であると主張したことも、教えたこともありません。神ご自身が、ダニエル12:4におけるエピローグから四つの幻を切り離しました。著者が提示しているのは、ダニエル12章の字義通りの言葉は三つのタイムラインが述べられている文脈であり、いかなる時の要素もその文学上の形態と共に文脈内に保たねばならないこと、すなわちタイムラインの日数は、黙示録13章で描かれている、未来の法王教支配に当てはまる字義通りの日数であり、過去の法王至上権を表す年数ではないということです(字義通りの文脈と字義通りの時に、一日を一年とする原則が用いられることはありません)。



論評5、6ページ：ダニエル11:31と12:11、ダニエル11:32-35と12:7-10の原語比較を参照。同じ言語的な対応によって、聖句が同じ出来事を扱っていることを示している。

返答：ダニエル12章と同様に、ダニエル11章は法王教を描写している故に、両方とも同じ時期、すなわち538-1798年のことについて述べているに違いないと論じられています。その通り、二つの聖句は言語学的に関連していて、同じ題材、すなわち法王教を扱っています。しかしその事実は、それが同じ期間を指していることを示してはいません。なぜなら、黙示録13章と14章は、未来の法王至上権を描いており、その時に「獣の刻印」が課せられて、その刻印を受ける者は最後の七つの災害を受けることが描かれているからです。単に、ダニエル12章は、その未来の法王至上権がどれくらい続くかを説明しているのです。



論評7ページ：「ダニエル12:7に出ているこの数字(sic=原文のままの意)の表現(ひと時、ふた時、半時)は、預言の象徴化(sic)が使われていることをはっきり表している。この象徴化は、第四の幻(10-12章)のこの部分(sic)を第二の幻(ダニ

エル7章)の7:25にある同じ象徴化(sic)に結びつけている。」

※ つまり、ダニエル12:7は象徴的な言葉であるというのである。

返答：上の声明は誤りだらけです！

「ひと時とふた時と半時」は、単なる「数字の表現」ではありません。ヘブルの預言的用語です。それは創世記7章と8章(洪水前)に由来します。5ヶ月は150日と同じであり、従って各々の月は30日です。従って12ヶ月はきっちり360日になります。ダニエルが「ひと時」という言葉を用いたとき、もともとの聖書的1年360日のことを言っていました。ダニエル4章の「七つの時」は、ネブカデネザルが正気を失った字義通りの7年であったと理解することは重要であります。しかしダニエル7:25の「ひと時と、ふた時と、半時」は、象徴的獣が登場する象徴的文脈において述べられているので、象徴的年数のことです。従って「ひと時」は、字義通りであるか、もしくは象徴的であるかがもともと決まっている訳ではありません。その意味を決定するのは、象徴的か字義通りかの文脈なのです。ダニエル7章は象徴的文脈において述べられている故に、「ひと時」は象徴的です。ダニエル12章には象徴が含まれていない故に、「ひと時とふた時と半時」は字義通りの3年半(1年は360日)、すなわち字義通りの1260日になります。

「ダニエル12章とダニエル7章は同じ象徴を含んでいない。」これらの事実は著者の立場を弱めるのではなく、かえって強化し、しっかりと固定してくれます。



論評7ページ：「……著者は……ある種のごまかしの言葉を使っている。」

返答：「ヘブルの預言的用語」間の違いを定義づけることは、「ごまかしの言葉」ではありません。1年360日という観念がどこから来たか、また「象徴的表現」はタイムラインが置かれていて、タイムラインが字義通りか、あるいは象徴的時を扱っているかを決定するところの文脈であることを説明しているのです。

要約すると：ダニエル12:5-13はダニエル7章の預言的アウトラインの一部ではなく、ダニエル8章と9章の預言的アウトラインの一部でもなく、ダニエル11章の第四の預言的アウトラインの一部でもありません。一連の歴史的諸事件を載せている歴史的「アウトライン」と、正確な時の単位を明確にしている「タイムライン」との間には違いがあります。四つのアウトラインと、「時の終わりまでどれくらいありますか？」との質問とダニエル12:5-13において与えられている答から成っているエピローグに見られるタイムラインとの間には、大きな違いがあります。



論評9ページ：「『警告』の著者がダニエル書12:5-13が実はダニエル11:30-35に結びついていると認めていることを知れば読者は驚くだろう。彼女は『これらの2つの句が関連していることは疑いの余地がない』と書いている。」

返答：その通り、二つの聖句が関連していることは否めません。なぜなら、どちらも法王教のことを言っているからです。その事実が、二つの法王至上権という黙示録 13：3 の描写を破壊する訳ではありません。第一の法王至上権は紀元 538 - 1798 年まで続き、獣の「頭の一つが死ぬほどの傷を受け」ました。黙示録 13：3 は続けて、「その致命的な傷」が治った後に、「全地の人々は驚きおそれて、その獣に従」ったと述べ、未来の法王至上権を描写しています。



論評 9 ページ：「……著者はエレン・ホワイトの言っていることを誤って解釈し、それを根拠として、事実上この預言(ダニエル 11：30 - 35)の二重成就を選んでいると言っている。」

返答：それは間違っています！ダニエル 12：5 - 13 は、ダニエル 7：25 の二重の成就ではありません。ダニエル 7：25 は第一の法王至上権のことを言っています。ダニエル 12：5 - 13 は未来の法王至上権のことを言っています。二つの異なる聖句は、二つの異なる歴史的イベントについて言っています。一つの聖句が二つの歴史的イベントを指している場合に、二重の成就と言うことができます。ダニエル 12：5 - 13 は、ダニエル 7：25 あるいは 11：30 - 35 の預言の繰り返しではありません。

更に、預言の二重(多重)成就の見解を否認した委員会(1981 - 1990 年)は、「聖書の言葉は二重の成就に満ちている」と述べている SDA パイブル・コメンタリー(一巻、1017 ページ)と矛盾しています。



論評 10 ページ：「著者は預言[ダニエル 12：5 - 13 の黙示的な預言]を西欧思想の眼鏡を通して解釈している。」

返答：神が明瞭明確な聖書の言葉を、特にダニエルの預言をヘブル人の文化に適応させたのは、西欧人に彼らの論理、順序、連続性、意味を理解させないためであったと認める用意のある読者はおられるでしょうか。

「聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である」(Ⅱテモテ 3：16)。



論評 12 ページ：「黙示録 13 章には、……法王権の回復と世界的名声の時代に正当に適用できるときは入っていない(適応できる時の期間というものはない)。黙示録 13：3-10 は、著者が持ち出した地球の最後の 1350 日に適用するためのタイムラインに対応していない。(著者が提案している、この地球の最後の 1350 日というタイムラインを支持していない)」

※ つまり、黙示録 13 章の 42 ヶ月は未来に適用される期間ではない。(1350 日は、1335 日のことであろう)。

返答：事実は、42ヶ月という黙示録13：5における期間(ダニエル12：7の「ひと時とふた時と半時」と同じ時の長さ)を、エレン・ホワイトが未来の法王至上権と日曜休業令論争に関連させ、二重の成就の中に置いたということでありませぬ。

「最終時代に、サタンは、大いなる力と天来の輝きをもって現れ、全地の主と称するであろう。彼は、安息日が週の第七日から第一日に変えられたと宣言し、週の第一日目の主として、この偽の安息日を彼への忠誠の試金石[テスト]として提示する。その時、黙示録の預言の**最終的成就**が起こるであろう。『また、龍がその権威を獣に与えたので、人々は龍を拝み、さらに、その獣を拝んで言った、……この獣には、また、大言を吐き汚しごとを語る口が与えられ、四十二ヶ月のあいだ活動する権威が与えられた。……そして彼は、聖徒に戦いをいどんでこれに勝つことを許され、さらに、すべての部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。地に住む者で、ほふられた小羊のいのちの書に、その名を世の初めからしるされていない者はみな、この獣を拝むであろう。……』(黙13：4-18を引用)」(原稿19巻、282ページ)。

538-1798年の第一の法王至上権において、法王教は全世界ではなくヨーロッパ中を支配しました。論評は、エレン・ホワイトの書物にほとんど、あるいは全く言及していません。BRIにいる幾人かの人々の立場だけを提示していますが、本書「警告」のように、ダニエル12：5-13のタイムラインを「各時代の争闘」における最後の十章に結び付けようとはしません。もう一つ、考慮すべき引用文があります：

「聖書の中には、特に我々の時代に関係している真理が提示されている。聖書の預言は、人の子が現れる直前の期間を指し、ここにその様々な警告や脅迫が特に優先的に当てはまるのである。

ダニエル書の預言的期間[タイムライン]は、大終局[イエスの再臨]の間際まで伸びており、その時起こるべき諸事件について[再臨の日時ではない]みなぎる光を投げかけてくれる。黙示録も、最終世代のための警告と教訓に満ちている。愛された弟子ヨハネは、靈感の指示の下、地上歴史の終結に結びつく恐るべき、わくわくさせるような場面を描いている」(IRH367、1883年9月15日)。

明らかにBRIの神学者たちは、エレン・ホワイトの書物を権威あるものとして考慮に入れず、それらの引用文によって自らの立場を形成しようとしていません。



論評12ページ：「著者の論理では、この[1時間という]表現[黙示録17：12；18：10, 17, 19]は文字通り『1時間』としている。……これらの『1時間』という表現が象徴的なものを意味しているという証拠は実際にはない。まして、これが文字通り1時間ということでもない。」

返答：タイムラインや時の要素が字義通りか象徴的かを決定するのは、文脈(前後関係)です。黙示録 17：12 と 18：10, 17, 19 の文脈は象徴的です。黙示録 17：12 の「10の角」は象徴的であり、「獣」も象徴的表現です。従って、文脈は象徴的です。故に、その文脈内にある「1時間」は象徴的な時であり、1日を1年とする計算法によると、字義通りの15日を表しています。但し、ダニエル 12：5 - 13 は字義通りの言葉で書かれていて、故に文脈は字義通りということになります。従って、タイムラインは字義通りの日数であり、地上歴史の終わりに起こる諸事件に注意を向けるものなのです。



論評 12 ページ：「たとえば、黙示録 18：8 はバビロンのことをこのように記している。『それゆえ、一日のうちに、さまざまな災いが、……』2節後に地上の王たちは『不幸だ、不幸だ、大いなる都、／強大な都バビロン、／お前は、ひとときの間に裁かれた。』といている。……しかし、それは1日か1時間か？」

返答：「バビロン」は象徴であります。従って「1日」も「1時間」も象徴的時になります。象徴的時は常に、エゼキエル 4：6 と民数記 14：34 の1日を1年とする原則によって解釈されます。「わたしは1日を1年として……あなたのために定める。」従って、七つの最後の災害は象徴的「1日のうちに」、すなわち1年の内に起こるのです。しかし「彼女(バビロン)に対するさばき」は第七の災害のときだけに起こり、それが「バビロンの滅亡」と呼ばれるものです。象徴的「1時間」は、字義通りの15日に当たります。それは非常にめんどろだと思われるでしょうか。「1日」や「1時間」という期間は明確な時の単位であり、「不定の時」や「短い時間」ということではありません。このような定義づけは聖書的でなく、「神学的」人間の推測に過ぎません。



論評 13 ページ：「常供」(ヘブライ語では Tamid) について：「これは許しがたい事である。著者は強引にダニエル書の 12：11 を未来に、字義通り、終わりの時として成就をさせるため、これを構築している。」

返答：著者の立場は、タミードという語源から取られています。ストロングの聖書語句辞典によると、それは「どちらの方向にも無限(永遠から永遠)に伸ばすこと」を意味します。その定義は、著者による「作り事」ではありません。「常供(タミード)」という言葉は、民数記において、聖所での絶え間ない(日毎の)犠牲を指す形容詞として用いられています。ところがダニエル書においては、タミードは形容詞ではなく、名詞になっています。つまり「連続の」ではなく、政府(統治)の「力と位と権威」の連続体として訳されるべきものであります。それは神の御座に由来し、「主権」としてアダムに与えられ(創 1：26)、そして国々の主権がある国家から「取り除かれ」、別の国に与えられるといった歴史が続きました。1844年以前、「さばきの時がきた」とのメッセージを伝えた人(再臨運動家)たちは、ダニエル 8：11 - 13 の「常供」をこのように理解していて、黙示録 13：2 にその解釈をさせたのでした。彼らはダニエル書と黙示録を相互に解釈させました。「……龍[異教ローマ]は自分の力と位と大いなる権威とを、この獣[法王教ローマ]に与えた」(538年)。エレン・ホワイトは、これを「正しい見解」と呼びました。(初代文集 155 ページ参照)。

注：「警告」の著者が、1844年以前に大再臨運動を起こした人々の持っていた見解を作り上げたのではありません。1844年以後に現れた他の様々な見解が暗黒と混乱をもたらしたと、エレン・ホワイトは言明しています。これらの見解は、「常供」(タミード)を天におけるキリストの務めとしています。

「常供」が取り除かれる時から1290日を数え始めることができる、とダニエル12:11は言明しています。もしそれが天におけるキリストの務めのこと、すなわち私たちはその時を知り得ないと警告されてきた恩恵期終了のことであるならば、1290日を数え始めるべき時を決して知り得ないこととなります。しかし、常供が取り除かれるというのが、世界の国々が自らの主権を、法王(黙示録13章の獣)を頭とし、世界規模の日曜法令化においてその獣の刻印(力と位と権威のしるし)を課す新世界政府に手渡すことを言っているとすれば、その事件を見て1290日を数え始めるための合図とすることができるのです。未来の法王至上権は、彼が「ついにその終りにいたり、彼を助ける者」がなくなるまで続くのです(ダニエル11:45)。

注：ダニエル12:5-13のタイムラインは、ダニエル11:31-35ではなく、ダニエル11:40-12:3の諸事件と調和しています。



論評13ページ：「著者は読者に、単語『日常の供え物』に関して犠牲の概念を全部取り除くように要求している。……なぜか？そうすることで、著者は言葉の定義を置き換えることができるからである。」

返答：「常供」という言葉に関して犠牲(燔祭)の概念を全部取り除くように要求しているのは、「警告」の著者ではありません。幻の中で預言者を通して語られたのは神でした。神は次のように言っておられます：

「それから、『常供の燔祭』の『燔祭』という言葉は、人間の知恵によって附加されたもので、本文にはないものであることをわたしは見た。そして、主は、審判の時の叫び[大再臨運動]を上げた人々に、それについての正しい見解をお与えになった。1844年以前に、人々が一致していたときには、ほとんどすべての者が、『常供』について正しい見解を持っていた。しかし、1844年以来の混乱のなかで、ほかの意見をもつものが現れて、暗黒と混乱が起こった」(初代文集155ページ)。



論評14ページのIV、結論：「著者自身ですら、そのときについての推論は内容が乏しいと感じている。彼女は言う。『アメリカの日曜休業令と世界的日曜休業令の間には60日のインターバル(差)がある(これを適用したとき)。これら二つの法律が出る間に60日のインターバルがなければ、この表の中でなにかがおかしいことはすぐに分かる。そして他の見方をすることが必要になってくる。』」

返答：「tenuous (乏しい、希薄な)」と「tentative (試験的な)」という語は、同じ意味ではありません。著者がタイムラインの適用について語ったのは、「内容が乏しい (tenuous)」からではなく、「試験的な (tentative)」ものとしてでした。「事の成り行きを見守ろう」という意味です。神がお与えになったタイムラインは、決して乏しいものではなく、不動の神の言葉なのです。しかし私たちは、誤ることのある人間です。私たちは、謙虚に自らの弱さを認める必要があります。しかし神は、適用が正しいかを私たちが知ることのできるようにと、これらのタイムラインに、テスト期間となる最初の60日までも組み込んで下さいました。もし60日のインターバル(差)がなければ、私たちは謙虚な思いで、1844年当時(大失望直後)の先駆者たちのように、聖書に戻って研究し直さなければなりません。しかし正しければ、その時神の民は最後の危機を通過するときも、光の中を一步一步進んでいくことができるのです。

ダニエル12章の三つのタイムラインは、神が与えたパラドックス—完全のモデルで、それは「そのとき起こる諸事件に光の洪水(あふれるほどの光)を投げかけてくれるものです。



論評14ページ：「著者は……古典的な未来主義を否定しているにもかかわらず、無意識のうちにダニエルの他の預言も同じように切り離してしまっている。」

※ つまり、未来主義のテクニクを使っている。

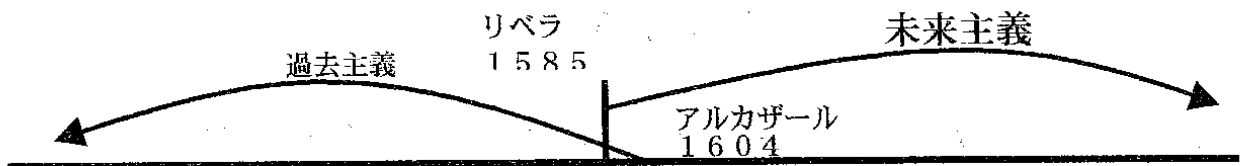
返答：論評を書いた人たちは、無意識のうちに、ダニエル12:5-13の三つのタイムラインを過去に置き、こうして古典的な過去主義のテクニクを用いました。新しい形態で「終末の過去主義」が構築されたのです。

「未来主義」も「過去主義」も、字義通りの言語と象徴的言語を置き換えるという、単純ではあるが非常に効果的なテクニクに基づいています。字義通りの文脈と象徴的文脈を置き換えるのは、サタンの常套手段です。

- 例1. 創世記1章の字義通りの「1日」が、何百万年もの年月を表すべく、象徴的言語に置き換えられました。こうして進化論が構築され、創造主や創造週、また第7日安息日の必要を崩したのです。
- 例2. 1500年代、イエズス会司祭フランシスコ・リベラによって、ダニエル7:25の象徴的「ひと時、ふた時、半時」が、字義通りの言語すなわち字義通りの3年半に置き換えられました。彼はそのタイムラインを、遠い未来の3年半と推定しました。これは「未来主義」です。宗教改革者たちは、ダニエル7:25のタイムラインを用いて、「小さい角」の正体は、紀元538年以来君臨している法王であるとしました。未来主義の目的は、第一の法王至上権に向けられた非難をそらすことでした。
- 例3. ルイス・デ・アルカザールという別のイエズス会司祭も、ダニエル7:25の象徴的タイムラインを字義通りの3年半に置き換え、それを遠い過去のこととしました。これは「過去主義」です。この過去主義も、第一の法王至上権(538-1798年)に向けられた非難をそらせるのに一役買いました。

現在、ダニエル 12:5-13 における三つのタイムラインを字義通りの文脈からはずして、あたかも象徴的時のように置き換え、この三つに「1日を1年とする原則」を誤って用いています。新しい形態で構築された「終末時代の過去主義」です。結果はまたも、法王教に向けられた非難をそらし、未来の法王至上権を認めないようにさせるのです。

BRIの神学者たちが何故、ダニエル 12 章に関してこのイエズス会のテクニックを用い、獣の刻印もろとも、来るべき法王教支配を保護しようとするのでしょうか？益々もって不思議ではありますが、その謎も間もなく解けることでしょう。



論評 14 ページ：「さらに、ダニエル 12 章への 1日=1年の原則を否定して、いつのまにか、事実上これをダニエル書 7, 8, 9 章に適用しなくなっている。」

返答：著者が、ダニエル書 7, 8, 9 章における 1日=1年の原則を否定したことは一度もありません。文脈が象徴的であるならば、時の要素は象徴的であり、時に関して象徴的表現が用いられていれば、1日を1年とする原則によって解読されねばならないと、著者は数回にわたって明言しました。またダニエル書 12 章のように、文脈が字義通りであれば、タイムラインは字義通りの時であり、字義通りの時に1日を1年とする原則を用いてはならないとも、著者は一貫して述べてきました。



論評 14 ページ：「ダニエル書にも黙示録にも、真実と誤謬の間の最終争闘についてのタイムフレーム(時の枠)は示されていないのである。セブンスデー・アドベンチストは、この聖書の沈黙を尊重すべきであり、神が啓示されていないことを推測することは慎むべきである(使徒行伝 1:7 参照)。」

返答：ダニエル 12:5-13 は「聖書の沈黙」ではありません。最後の大いなる叫びにおいて、「ししがほえるように大声で叫んだ」黙示録 10 章における七つの雷の声も、「聖書の沈黙」ではありません。これら七つの雷の声は、ダニエル書のタイムラインを開始させ、終了させる諸事件についての預言の成就なのです。最初の雷の声は、1844 年、2300 日/年タイムラインの終わりに聞かれました。残り六つの雷の声は、ダニエル 12 章のタイムラインの始まりと終わりに聞かれることでしょう。

「間もなく神の定めによって、大いなる叫びへと膨れ上がるメッセージが与えられるであろう。その時ダニエル(書)が、彼の証を伝えるために[未来形]、割り当ての地に立つであろう」(手紙 54、1906 年 2MR)。

[黙示録 10 : 4 の七つの雷の声について]「これらは……時に関して、その順序に従って明らかにされる [開かれる] であろう未来の諸事件に関係している。その時ダニエルの預言は [大いなる叫びにおいて] 世に与えられるべき [未来] 第一、第二、第三天使の使命に、その位置を占めるであろう」(7SDA バイブル・コメンタリー 971 ページ、1MR99)。

無論私たちは、人間の意見、憶測、推測に過ぎない「推論」は控えるべきです。しかし私たちは、聖書全体の相互参照によって、完全な真理の鎖の環がすべてつながるまで、預言の意味を探るよう勧められています。各時代にわたって前進していく真理は、「我々と我々の子孫に属する」ものなのです。

著者の弁明

イエスは告発されたとき、「口を開か」ず、「ほふり場にひかれて行く小羊のように」十字架へ行き、自己弁護は一切なさいませんでした。イエスは私たちの模範であります。論評にある多くの非難、告発について、「警告」の著者は自己弁護をいたしません。「祭司長、長老たちが訴えている間、イエスはひと言もお答えにならなかった。するとピラトは言った、『あんなにまで次々に、あなたに不利な証言を立てているのが、あなたには聞えないのか』。しかし、総督が非常に不思議に思ったほどに、イエスは何を言われても、ひと言もお答えにならなかった」(マタイ 27 : 12 - 14)。

しかし真理に関して質問されたときは、イエスは口を開かれて、極めて明瞭、明確に語られました。

「すると、大祭司が立ち上がってイエスに言った、『何も答ええないのか。これらの人々があなたに対して不利な証言を申し立てているが、どうなのか』。しかし、イエスは黙っておられた。そこで大祭司は言った、『あなたは神の子キリストなのかどうか、生ける神に誓ってわれわれに答えよ』。イエスは彼に言われた、『あなたの言うとおりでである。しかし、わたしは言うておく。あなたがたは、間もなく人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう』」(マタイ 26 : 62 - 65)。

従って、著者が言及するのは、これら真理と誤謬の争点だけであります。論評への返答は、誤謬の醜さを暴き、聖書の「現代の真理」を掲げるための知恵を、神に祈り求めつつ書きました。目前に迫っている最後の大きな危機において、希望と慰めを与えてくれる現代の真理を、神の民は強く必要としているのです。

1999年第1期の

日本語安息日学校教課について



砂川満

この記事の目的は、教団の批判でも、彼らの責任を追及することでもないことを、あらかじめ断っておく。但し、「アンカー」の紙面を割いてまでこの問題を取り上げるのには、無論それなりの理由がある。

初めに、安息日学校教課の目的、意義について読者に問いたい。世界中ほとんどのSDA信徒が同じ教課を用いて聖書研究をするのは、何らかの重要な意図があるからに違いないと（アンカーの）筆者は考える。また、そこまでに至るには、様々な過程を経なければならぬはずである。教課の最後のページに、次のような記載がある。原作版発行—セブンスデー・アドベンチスト世界総会安息日学校・信徒伝道部。まずは、何らかの方法で選出された著者（第1期の場合はレオ・R・バンドルソン氏）により原稿が書かれる。恐らくそれが、世界総会安息日学校・信徒伝道部によって編集されて教課の原文が出来上がる（通常は英語）。その原文が世界各地の教団支部に配られる。そして日本語の信徒伝道部によって忠実に翻訳され、慎重に編集された後、日本語教課が初めて日本の信徒の手に渡る、と筆者は推察していた。大変な行程だ、まことにありがたいことである、と。

ところが、1999年第1期の英文教課を偶然入手することができ、それを日本語のものと比較して、両者の間にかかなりの相違点があることを発見した。第1期のテーマは、「啓示と靈感の研究」であった。著者のバンドルソン氏は、序言の中で次のように述べておられる。

「今期の研究は、私たちが神の啓示を受け入れる助けを与えてくれます。それは、(1)聖書が靈感によってどのように書かれ、保存されてきたか、(2)いかにして神の啓示を理解するかについて教えてくれます。今期の研究ではまた、神の啓示された御心を理解する上で必要な情報について学びます。これらの情報は私たちがサタンの攻撃と偽りから守ってくれます。」

ここに、著者がこの教課を著わした意図が要約されているのではないだろうか。ここでは、日本語の教課の中で、教課を著わした当人の意図と抵触するのではないかと思われる部分を取り上げる。もし本当に抵触するならば、由々しきことである。そうであるか否かは、読者の判断に委ねることとする。

まず、教課の57ページに、第6課のまとめが述べられている。それによると、「今日の私たちは、その気さえあれば、原語と現代の多くの翻訳によって聖書を研究することができます。これらの資料はその性質と正確さにおいて異なるので、賢明に自分に合った聖書を選ぶ必要があります」となっている。はっきり言って、最後の文はと

でも正確な翻訳とは言えない。教課全体の性質をも覆しかねない。実際はこうである：「これらの資料はその性質と正確さにおいて異なるので、それらを用いるにあたっての詳しい知識を持つことが賢明です。」一体全体、「自分に合った」という言葉がどこから出てきたのか、不思議千万である。

62 ページの最後には、「キリストへの道」からの次のような引用がある：

「神は、この世でさえ、そのみ言葉の真理をいつもその民にあらわしたいと望んでいただきます。……み言葉は聖霊によって与えられたのでありますから、その聖霊の光に照されてはじめて、み言葉を理解することができます」(『キリストへの道』152 ページ)。

途中……で省略されているが、その辺りを福音社の出版による「キリストへの道」で見るとこうなっている：

「神は、この世でさえ、そのみ言葉の真理をいつもその民にあらわしたいと望んでいただきますが、この知識をうる道はただ一つしかありません。」

つまり、逆説「が」が抜かれて読点が句点に変えられ、おまけにその句の結論ともいえる部分が……となっている。しかも……の部分、英文にはきちんと載せられている。編集者の立場に立って考えてみた場合、紙面の関係上、どうしても多少は省略しなければならない箇所が出てくることもあるだろう。しかし、この部分に関しては、同ページの下部に十分な余白がある。一体なぜ、十分な余白があるにもかかわらず、あれだけ短い文章を省いてしまったのか。更に、逆説の「が」と読点でもって続いている文章を敢えて句点で閉じてしまうのは、果たして些細なことであろうか。証の書は「預言の霊」(69 ページ参照)であるという認識が、欠けているのではないだろうか。

70 ページの初めに、「エレン・ホワイトは圧倒された」という箇所がある。そこでは、途中からエレンの夫ジェームズ・ホワイトの言葉が引用されている。

「ホワイト夫人は、1865年12月のロチェスターでの幻に関して数千ページのあかしを書いたが、その時以来、自分の働きの責任に関連して、もし死ぬことと別の幻を受けることとのどちらかを選ぶことができたら、自分は死ぬことを選ぶと、20回以上も語った。安息日の夜以来、彼女は新しい責任に関して失望と悲しみの感情を抑えることができないでいる」(『レビュー・アンド・ヘラルド』1868年6月16日)。

預言者の責任がどれほど重いものであるかが厳粛に示されているが、問題は最後の文である：「……彼女は新しい責任に関して失望と悲しみの感情を抑えることができないでいる」とあるが、英文は次のようになっている：“……it has been with difficulty that she has been able to control her feelings of disappointment and sadness in view of her new responsibilities.”つまり、新しい責任を思っただけで困難を覚えながらも、彼女は「失望と悲しみの感情を抑えることができた」のである。感情を抑えることができるのと、できないのとでは大違いである。我らの預言者は自制心の欠落した人

物であったと受け取られかねない。そう考えるのは、いささか心配し過ぎだろうか。

72 ページの中ごろに、「しかし、驚かれるかもしれませんが、エレン・ホワイトは非常に人間的で、冗談の好きな人でした」とあるが、この英文は、“What a pleasant surprise it is to learn how human, even fun-loving, Ellen White was.” となっている。気になるのは、「冗談の好きな」という部分である。fun-loving というのは、「愉快で楽しいことの好きな」という意味である。決して誤訳ではないが、「冗談の好きな人」とすると、どうしても少々低俗なイメージを抱いてしまう。「お前自身が低俗だから、そんなイメージを持ってしまうのだ」と言われれば、返す言葉はないが。

同ページの下方に、「残念なことですが、一部の人はエレン・ホワイトの書物が完全な靈感を受けていることを否定します」とある。正しくは、「……完全な靈感を受けていることを巧妙に否定します」である。教会の内外を問わず、エレン・ホワイトの靈感を、また彼女が預言者であることを否定する人は少なくない。警戒しなければいけないのは、一見彼女を預言者と認めながら、その書き物の信憑性について疑いを投げかける人たちである。

「歴史はくりかえされている。聖書を目の前に開いて、その教えを尊ぶと告白しながら、今日多くの宗教家たちは、聖書を神のみことばとして信じる信仰を破壊している。彼らはみことばを批評するのに忙しく、みことばにはっきり言われていることよりも自分自身の意見を第一にする。彼らの手によって、神のみことばは人を生れかわらせる力を失う。不信仰がはびこり、不義が盛んな理由はここにある」（希望上 322 ページ）。聖書も証の書も、すべて神の靈感によって書かれたみことばなのである。

110 ページの 4、5 行目に、「大争闘のドラマが終局に近づくとつれて、聖霊と天使たちは私たちが神と真理に対して心からの忠誠を尽くすのを助けてくれます」とあるが、英文に基づき、抜けている言葉を加えて訳すと次のようになる：

「(大争闘の)ドラマが終局に近づくとつれて、聖霊と天使たちは、私たちが生命そのもの以上に、神とその真理に対して心からの愛と忠誠を尽くすのを助けようと求めておられます。」

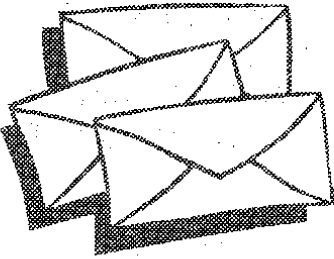
著者は、次の引用文を思い出しながら、これを書かれたのではないだろうか。

「真理は、生命よりも愛すべく尊いものであった」(初代文集 440 ページ)。

英文と異なる箇所は他にいくつもあるが、日本語の編集者側にも、紙面の関係やその他やむを得ない事情があったと思われるし、またそう思いたいものである。ここでは、特に重大と思われるところだけを取り上げた。前述したように、この記事の目的は、教団の批判及び糾弾、または責任の追及でもない。第一の目的は「情報の提供」である。ここでは事実だけを情報として載せるように努めた。日本語の教課が、原文であるはずの英語教課とこれほど食い違っているというのは紛れもない事実である。そ

れが意図的なものであったか否かについては、ここでは問わない。ただ以前、教課を用いなかったためにお叱りを受けたことがあった。世界中のSDA信徒が同じ教課を用いて学ぶのは、教会一致において重要なことである、というような理由であったと記憶している。しかし、原文と異なる教課を用いて、果たして教会一致が保てるだろうか。

最後に、「世界総会の声は神の声か？」との問いに関して、日本の教団は自ら、否と答えている、と言わざるを得ない。もし神の声であるなら、世界総会が責任をもって発行した教課の原作版を、あれほどまでに変えるようなことは決してしないはずだからである。



読者からの便り

私はアドベンチストの信者になって4年がたちます。今までいろいろな牧師、講師の方々の話を聞きましたが、今度ほど感動したことはありません。私なりに聖書を読み勉強してきましたが、いつも自分が疑問に思っていたことが全てマリアン・ベリー女史によって解き明かされたからです。これから一番大切な時代を生きる私たちにとってこのダニエル書と黙示録が明確に解明されなければならない今の時期に、どこの教会に行っても牧師のお話からは教えていただけませんでした。このたび、このすばらしい学びの場に入らせていただくことができ、心から感謝しております。マリアン・ベリー女史のことをお聞きしましたら現在のお歳になられるまで、地理、歴史あらゆる方面から勉強なさったご苦勞のエキスを、もったいなくもこのような小さき者に神様からの知識を与えていただいたこと、心より厚く厚くお礼申し上げます。この世ではもう二度とお目にかかれなれないと思いますが、天国でいつの日かお会いできることを楽しみにしております。どうぞお体にお気をつけられ、この伝道が日本の地で大成功されますよう心からお祈りいたしております。M.N

貴重な資料をお送りいただきありがとうございました。主がお帰りになる日を、世の煩いで、ついうっかり念頭におかないで生活するようなことのないように気をつけたいと思います。ローマ法王の最近の言動は知りませんでした。本当によい時にお知らせ下さったことを感謝しております。H・Y

S. D. A. 信徒の大多数は、すぐ近くまで迫っている諸事件を気にもとめていないようです。自分たちが備えないばかりか、子供たち、まわりの者にもさせていません。聖所の真理によって興されたはずのS. D. A. クリスマンも「至聖所の最後の贖い」に目を向けず、「愛の神様がさばかれるはずがない」と主張する姿は悲しむべきことです。

つくづく警告に不注意であってはならないと思います。真剣に学び、真理によって清められ、主の日に備えたいものです。 K・M

娘にもアンカーを送って下さって感謝します。「なぜ、S. D. A. でなければならないのか? なぜ、土曜日安息日なのか意味がやっとわかってきたような気がする。」と書いてきました。若い人はほとんど、なぜS. D. A. でなければならないのかを分からないまま、この教派に所属しているのではないかと書いていました。このような傾向になってしまったのはいつの頃からなのでしょう。娘のためにも若い人々のためにも、もっともっと現代の真理を理解し納得し、その精神に生きることを学びたいと願っています。 Y・N

いつもいつも“時にかなった食物”という言葉がびったりの本やテープをいただくことができ、とても感謝で、また今の時にできるだけ多くの方々にこの真理が伝えられるよう願わずにおられません。ダニエル書 12 章などの預言も含めて最終時代に生きる私たちに一步一步道案内をして下さるその神様の優しい御愛に本当に感謝でいっぱいです。今思いますと、この本を学ぶ以前には、御再臨が間近であることはとても感じていましたが、漠然とした未知の将来の出来事の不安、緊張感が強かった気がします。生きて主をお迎えする準備を教えていただき、また一番困難なときに一日一日と導かれながら、待つことの出来る幸いに、不安やおそれは感謝に変わり、“神は愛である”とのみ言葉を再び心から実感しております。 C・I

「警告」のすばらしいメッセージを心より感謝いたします。実に多くの情報を集めておられ、今大変な危機の時代にあることを実感いたしました。信仰の足りない者ですが、信仰が増し加えられるよう主に祈り、聖書を学ぶ時間を与えられるよう祈りたいと思います。娘が現在 2 歳 10 ヶ月で、日中は洗濯や食事のしたく、外に散歩につれていけないといけませんので、娘を寝かしつけた後、夜中くらいしか、自分の時間がもてません。このわずかな時間を有効利用できるようにしたいと思います。 Y・M

先日来より聖書と証の書を一人で学ぶことがとても楽しくなりました。初代文集なるものはとてもすばらしく、ホワイト夫人が与えられた幻に感動いたしました。またこのようなすばらしい本が日本においてなぜ絶版になっているのかと思います。アドベンチストの意味をしっかりと学ぼうとしています。一人で聖書研究しておりますので、私が成長し神さまの役に立つ者になるよう、ご加禱ください。また、先生にいただいた警告の説明とともに学んでいくととてもよく分かり、ありがたいです。 M・T

私は、バンピの会員でM兄がアンカーを送って下さいました。一読してびっくりしました。私はセブンスデー・アドベンチストになって40年教えられて色があせていたものに色がつきました。ほんとにありがとうございました。 S・W

ダニエル—黙示録セミナー、本当にずしーんと重い三日間でした。昔、聖書に出会って、熱心に読んでいた頃の気持ちを思い出しました。深い霧の中からぼんやりと光が見

えてきたような感じでした。ありがとうございました。T. M

あがないの業は十字架で終わったのではなく、天の至聖所に移され、今なお続いているとは、なんと尊い真理でしょう。人間はどこから来て、どこに行くのか、その生存に意味があるのかと悩んだ青春の虚しさに造り主なる神の存在を知らされ、恵みに満たされました。特にセブンスデー・アドベンチストを通して、知識のみでなく、魂の体験によって、神との出会いを許されました。もうこれだけでも十分な気がするのですが、まだまだ奥が深く、至高の高嶺が天にまで届いているのを見せられています。聖書からあふれ出ている光の輝き、ダニエル、黙示録が時にかなって解釈されていることに驚嘆いたしました。しかし、すでに夕闇が足下に深く忍び寄っているのを感じます。五時直前、どんな働きがあるのでしょうか。一瞬一瞬を大事にして、全力を尽くして、神様の前に奉仕させていただきたいと願っております。Y. N

この度、「警告」の本を読ませていただき、感動しました。ダニエル11章、12章は、非常に困難なところと研究する気持ちもありませんでした。ベリーさんの解き明かしで、その流れが明確にとらえられ、すっきりしました。ダニエル書と黙示録がこんなに密接につながっているのに驚きました。これからの学びに大いに助けになりました。H. M

イスラム国、日曜日休業令を受理する

パキスタンの市民の90パーセント以上がイスラム教である。あなたは今までに、どのようにイスラムの国でホワイト姉妹の言われた驚異的なことが成就するのだろうかと思ったことがあるだろうか。

「宗教自由の国であるアメリカが良心を強制し、偽りの安息日をあがめるように人々に強要することで教皇制と結合する時、地球上のあらゆる国々の人々はアメリカの例に従うように導かれるであろう」6 T 18。

1997年3月1日に、「パキスタンは公式にイスラムの週末を断念した・・・。[ナワズ] シャリフ氏 [パキスタンの首相] は就任した6日後、日曜日にテレビで放映された演説で、休日を金曜日から、日曜日に変更することを個人的に命じた」。 (デッカ・ヘラルド、バンガロ、インド、3月2日、1997)。

なぜパキスタンは変えたか？ 理由は二つある。第一に、国際連合は、国際労働者組織 (ILO) を通して、日曜日を一日、世界中のすべての労働者のための休養日と奨励している。さらに重要な事は、世界の株式取引所、金融市場、商品マーケット、貴重な金属マーケットと先物マーケットがすべて金曜日に活動中で、そして日曜日に閉じられているという事実である。ロンドン、ニューヨーク、東京、香港と他のマーケットが営業している間に、国がその日の間その国際的なビジネス活動を閉じることはできない。

悪魔は彼が日曜日の法律を制定することができる多くの策略を持っている。

The Remnat Herald, 1998, 8

★「神道、仏教の国日本には、日曜休業令という問題は起こり得ないし、起こらない」とよく聞く。頑固なユダヤ教、最も頑固なイスラム教さえローマに屈し、日曜休業令を取り入れるならば、ローマの手先であるアメリカとの「日米運命共同体」「アメリカリッポン」「ジャメリカ」という関係にある日本がこの世界的な問題から免れるはずがない。政治的にこの様に深い関係を持っている日本は、獣の像をつくることを命じるアメリカにすぐ従うのではないだろうか。宗教的に、神道は自然崇拝である。太陽礼拝であり、天照大神の国、日本は天皇からのお言葉があれば、一ころであろう。皇族はすでに、ローマと深い関係にあることは周知のことである。さらに、靖国神社参拝という日本人の習わしは、靈魂不滅説の代表的なものである。日本は異教の二大特質をしっかりと持っている。日曜礼拝と靈魂不滅である。だから、いとも簡単に、日曜休業が法律化され得る土壌は十分整っているはずである。預言者が言っていることを否定することはできない。

「諸外国は、アメリカ合衆国の例にならうであろう。アメリカが先導するとはいっても、同じ危機が世界中至る所にいるわが民に臨むであろう。」6T395

『その不品行に対する激しい怒りのぶどう酒を、あらゆる国民に飲ませた者』（黙示録14：6-8）。これはどのように行われるのだろうか。偽の安息日を受け入れるよう人々に強制することによってである。」8T94

「安息日問題は、全世界が関与する最後の争闘の争点となる。」6T352。

〈イラン〉ハタミ大統領、法王ヨハネ・パウロ2世と会談

イランのハタミ大統領は11日、バチカンのローマ法王庁でローマ法王、ヨハネ・パウロ2世と初めて会談した。イスラム大国の指導者と世界のキリスト教社会に影響力を持つ法王の直接会談は歴史的であり、異宗教同士が対話を促進させる弾みとなりそうだ。側近らの話では、会談は終始穏やかな雰囲気で行われたという。

【ローマ11日石川貴章】イランのハタミ大統領は11日、ローマ法王庁（バチカン）の使徒宮殿の法王の書斎で、法王のヨハネ・パウロ2世と歴史的な会談を行った。イスラムの大国の指導者と世界のカトリック教徒を束ねるローマ法王との会談は、かつての「革命の輸出」からイスラム国家の民主化路線に転じた国と、キリスト生誕2000年祭に向け異宗教との「和解・協調」を進めるローマ法王庁の積極外交が軸を一つにして実現した。異宗教間紛争が絶えない中での両氏の対話が世界に与える影響は大きい。

25分間の会談を終えたヨハネ・パウロ2世はハタミ大統領を伴って記者団の前に姿を見せた。「今日は重要な将来に向けての良き日であった」。ローマ法王が声をかけると、ハタミ大統領が「神が私の健康と成功をもたらしてくれるよう、祈って下さい」と応じ、「平和と和解、道徳が最終的に勝利を取めることを望む」と述べた。

同大統領はこの後、バチカンのソダーノ國務長官と会談。中東におけるイスラム、キリスト教、諸文化の対話について話し合ったほか、人権問題やイランでのカトリック教徒の現状について意見交換したという。

ハタミ大統領は、ローマ法王との会談を今回の欧州訪問の最大の目的に掲げていた。ハタミ大統領は1997年に当選後、民主化・改革路線を走り続けてきたが、西側主要国には人権問題などをめぐってわだかまりが根強く残っている。

米国のキリスト教社会に多大な影響力を持つローマ法王との会談は、自ら提唱した対話路線を最も効果的に具現化したものだ。西側に門戸を開いたハタミ政権の姿勢をより強く印象づける上でも政治的効果は大きく、同大統領には、これによって米国の対イラン外交を柔軟路線に転換させ得るかもしれないとの期待もあるだろう。

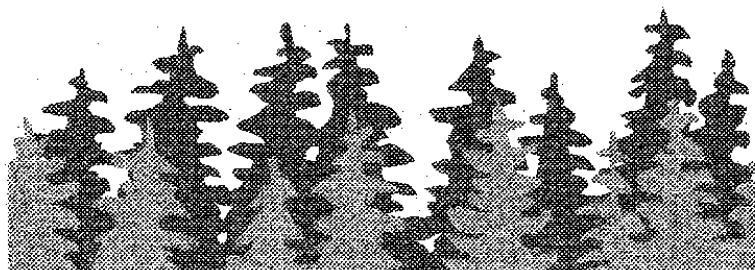
一方、ローマ法王庁はキリスト生誕2000年祭を機に、アブラハム(イブラヒム)を共通の父祖とするイスラム、ユダヤ、キリストの三宗教の和解・協調を一層促進させたい考えだ。

これにより、イスラム国家の中で制限されているカトリック教徒の信教、神父の活動が改善されることへの期待感のほか、2000年祭を三宗教の聖地が集まる中東諸国で演出したいとのローマ法王自身の悲願がある。それは、中東・イスラム諸国への接近を欠かせない。

毎日新聞 3月11日

- ★ カトリシズムの20世紀最大のライバルとされていた共産権力が1990年代に入って倒壊した。あと、ローマ・カトリシズムの前にイスラム権力が立ちだかっている。それも、ローマの戦略によって倒されつつある。すべての世の権力は、ローマの新世界秩序に組み込まれる。しかし、そう思われた矢先、最後のライバル、セブンスデー・アドベンチストが、天からの支援のもとに、最後の戦いに立ち上がるのである。

「彼らは小羊に戦いを挑んでくるが、小羊は、主の主、王の王であるから、彼らにうち勝つ。また、小羊と共にいる召された、選ばれた、忠実な者たちも、勝利を得る」黙17:14。



2000年は「聖年」

禁酒か林示煙すれば「免罪」

【ローマ27日＝西田和也】

「免罪」を求める信者は禁酒か禁煙の実践を……。ローマ法王ヨハネ・パウロ二世「写真」は二十七日、西暦二〇〇〇年を、カトリック教徒に「贖宥(免罪)」を与える「聖年」とする大勅書を発表し、「不必要な消費を慎む」ことでも免罪は得られるとして、「聖年」の間に少なくとも一日は、酒かたばこを断つよう呼びかけた。

ローマ法王が大勅書

カトリックでは、信徒は「聖形式のもの」

年」にバチカンへの巡礼や断食を行ったり、善行を施したりすること、犯した罪に対する免罪が得られる、と教える。法王は、大勅書の「聖年贖宥の条件」として、信徒に「悔い改める精神」を指摘、これらの行為に至る実践で示すよう求め、実践にまでの内省の重要性を強調は禁酒、禁煙も含まれるとし、免罪を安易に期待することを。大勅書は法王文書で最高といききを刺した。



「単に禁酒、禁煙するだけで天国に行けると考えるのは、贖宥の理念に反する」

禁酒禁煙すれば、贖宥(免罪)される？ 罪の許しを宣言する権利を誰が与えたのか。

中世時代の免罪符のようなものがまた復活するのか。 中世時代の下巻349ページに、社会道徳を向上させる禁酒禁煙運動が日曜休業令と結びつくのだろうか。

読売新聞

伝道用書籍：

- 「隠された闘い」 デビッド・ミラー著、砂川満 訳 1、500円
- 「預言の謎」 デビッド・ミラー著、砂川満 訳 800円

リバイバル書籍：

- 「現代の真理」 第三天使の使命—キリストの性質—完全な品性—終末事件—至聖所における最後の贖い。(10月に再版) 1、500円
- 「前途の危機」 ロバート・オルソン著、終末事件に関する証の書からの引用文。(10月に再版) 1,800円

ビデオ&テープ

- 「アルプスのイスラエル」 3,000 円
LLT プロダクション制作—日本語版
幾千年にもわたる苦難の中に信仰を守り通したワルデンセスの驚くべき物語。
- 「獣のしるし—666」 3,000 円
ローマ・カトリックと異教の結合—徹底研究
- 「どの聖書？」 3,000 円
「混ざりもののない聖書」がワルデンセス、宗教改革者、再臨運動に受けつがれてきた歴史。
- 1999年、マリアン・ベリーの、ダニエル、黙示録セミナーのカセットテープ（沖縄における）。
1セット18本 4,000 円（送料込み）

マリアン・ベリーの書籍

- 「警告」縮小要約版 500 円
- 「警告」大、ダニエル 12 章解説書 1,600 円
- 英文：Date-setting, Time-setting, Futurism, and Dirty Theology \$15.00
How to Survive the Seven Last Plagues \$7.00
その他

ハーバート・ダグラス著

「そして、それから」—聖所が解き明かすアドベンチストの使命 1、700 円



この印刷物は信徒の祈りと自由献金によって続けられています。
送金には郵便振替をご利用ください。

振替口座番号

02080-0-12121 サンライズ・ミニストリー

住所：〒905-0428 沖縄県今帰仁村今泊1471

サンライズ・ミニストリー出版部

電話：0980-56-2783

FAX：0980-56-2881

Eメールアドレス：anchor@cosmos.ne.jp